

「集団主義—個人主義」をめぐる 3 つのトレンドと現代日本社会

杉万俊夫（京都大学）¹

要 約

現代日本社会の特徴の一つを、「集団主義—個人主義」をめぐる 3 つのトレンドによって考察する。ただし、本稿で用いる「集団主義」、「個人主義」の概念は、従来、社会心理学で用いられてきた同名の概念とは、基本的に性格を異にする。すなわち、本稿では、規範を身体の溶け合いから擬制される「第三の身体」の声であると捉える大澤（1990）の規範理論に依拠し、第三の身体が具象的身体とオーバーラップする段階を集団主義、そのオーバーラップを減じ、第三の身体が不可視の抽象的身体となった段階を個人主義と定義する。

欧米では、「集団主義（前近代）→個人主義（近代）→身体の溶け合いへの回帰（ポスト近代）」という歴史的経路を辿ったのに対し、現代日本社会には、①集団主義からマイルドな個人主義へと向かうトレンド、②マイルドな個人主義から本格的な個人主義へと向かうトレンド、③マイルドな個人主義から溶け合う身体へと回帰するトレンドの 3 つが共存していることを、具体的な社会現象の例をあげつつ指摘した。20 年程度の近未来を見通すとき、③のトレンドが急速に主流になるであろうことを予想するとともに、このトレンドを②のトレンドと見誤ってはならないこと（平易に言えば、集団主義の減退を個人主義化と見誤ってはならないこと）を強調した。

キーワード：現代日本社会、身体論的規範論、集団主義、個人主義、個別化

本稿は、現代日本社会の特徴の一つを、「集団主義—個人主義」をめぐる 3 つのトレンド（動向）によって考察しようとするものである。ただし、本稿で用いる「集団主義」、「個人主義」の概念は、従来、社会心理学で用いられてきた同名の概念とは、基本的に性格を異にする。社会心理学、とりわけ、東洋人と西洋人の文化差に関心を寄せる比較文化心理学では、東洋人は集団主義的、西洋人は個人主義的であることが主張されてきた。しかし、そこに言う集団主義も個人主義も、個人の内面、すなわち、心（あるいは、頭）の中で生じる思考・感情プロセスの特徴、あるいは、思考・感情の発露としての行動の特徴を指していた。自分の心の中で、他者との関係を重視する思考や感情を惹起する傾向が集団主義であり、同じく自分の心の中で、自分自身（の思考・感情）を重視する思考・感情を惹起する傾向が個人主義であった。このように、集団主義も個人主義も、行為する本人（自己）の内面的思考・感情に注目した概念であり、いずれにおいても、顕在化した行動の違いを「内面からわき上がるもの（主体性）」によって説明しようとする姿勢が根底にある。その意味では、両概念とも、「自己の主体性」という観念を前提にしている。

それに対して、本稿では、大澤（1990）の規範理論に基づき、「他者の主体性」という観念に徹底的に立脚した上で、「集団主義」、「個人主義」という概念を捉え直す。「他者の主体性」に徹底的に立脚するということは、「自己の主体性」を原理的には否定するということである。さらに言えば、いかに自己が主体的に行為しているかのように思えても、それは錯覚であり、実は他者

¹ 京都大学大学院人間・環境学研究所 sugiman@toshio.mbox.media.kyoto-u.ac.jp

の主体性（あるいは、主体としての他者）に操られているにすぎない、と考える。

では、「他者の主体性」における「他者」とはいかなる存在なのか。他者の主体性は、いかにして形成されるのか。本稿第1節では、この点について、大澤（1990）の理論をわかりやすく紹介する。その結論として、人々は「互いに他者になる」という経験を通じて、「神」のような身体（後述の第三の身体）を生成し、その「神」に操られるに至ることが導かれる。しかも、その「神」は、具象的で可視的な身体から、抽象的で不可視の身体へと変態する可能性を有している。集団主義は、具象的かつ可視的な「神」によって操られる状態であり、個人主義は、抽象的かつ不可視の「神」によって操られる状態である。

第2節では、以上の理論枠組みを使って、現代日本社会の考察に歩を進める。具体的には、現代日本社会には、3つのトレンドが存在することを論じる --- ①具象的な「神」から、中程度に抽象的な「神」に移行するトレンド（集団主義からマイルドな個人主義へと移行するトレンド）、②中程度に抽象的な「神」からさらに抽象的な「神」へと移行するトレンド（マイルドな個人主義から本格的な個人主義へと移行するトレンド）、③中程度に抽象的な「神」が崩壊に向かうトレンド。その中で、③のトレンドは、あくまでも集団主義（マイルドな個人主義に残存する集団主義）の崩壊であって、それを②の個人主義化と見誤ってはならないことを強調する。

1. 「集団主義—個人主義」の再定位

（1）原初的な規範形成プロセス

大澤の規範理論については、杉万（2006 第1章；Sugiman, 2008）によるわかりやすい解説もあるが、以下では、さらに平易な言葉を用いて、かつ、本稿に直接関連する部分のみに限定して紹介する。

大澤の規範理論は、われわれが持っている常識的人間像から見ればオカルトにも見える状態から論をスタートする --- その上で、いかにして、われわれが常識的人間像を持つに至ったのかも説明される。そのオカルトにも見える状態こそ、身体（しんたい）の「溶け合い」である²。身体が溶け合うとは、たとえば、ある身体 A が頻繁に別の身体 B になり、身体 B も頻繁に身体 A になるような状態、すなわち、身体と身体の区別がない融合的な状態になることである。

まず、身体（しんたい）とは、それに対して固有の世界が現前する物質と定義される。決して、身体は「心を内蔵した肉体」ではない。そもそも、「心を内蔵した肉体」は、いかにわれわれの常識的人間像にはなっていないとも、廣松（1982）が精細に論じているように、その人間像は、われわれの素朴な日常経験とは矛盾さえしている。実際、イメージが「頭の中」に浮かぶ、「まぶたの裏」に浮かぶなど、言語的には、あたかも身体の内部にあるかのごとくに表現されるイメージも、素朴な経験では、身体の外部に現前する。

では、身体の溶け合いの前に、そもそも、ある身体が他の身体になるとは、一体どういうことなのだろうか。ここでは、その例を一つだけ紹介し、あとは、大澤（1990）、杉万（2006）に登場する多くの例に譲りたい。たとえば、演劇を見ているとしよう。役者が崖っぷちに追いつめられる。その迫真の演技は、まさに演劇を見ている自分が崖っぷちに追いつめられているかのように感じさせる。思わず手に汗がにじむ。絶体絶命。しかし、ふと、「我に帰る」。そして、自分は崖っぷちに追いつめられてはいないこと、観客席で演劇を見ているだけであることに気がつき、ホッとす。しかし、ふと我に帰るまでは、自分は誰だったのだろうか。ふと我に帰るまで、自分は舞台の役者だったのだ。そして、ふと我に帰った瞬間、観客席の自分に戻ったのだ。

² 身体の溶け合いは、大澤（1990）の間身体的連鎖のことである。

「他の身体になる」ことが、複数の身体の間で相互に頻繁かつ濃密に生じる状態、これが身体
の溶け合いである。3つの身体の間で、身体Aは何度も何度も他の身体B、Cになる。身体Bも、
身体Cも同様。このような状態が、3つの身体の溶け合いである。

複数の身体の溶け合いは、身体（ポジション）による経験の違いよりも、経験の共通性をクロ
ーズアップする。芳香を放つバラを囲む3つの身体、しかも、溶け合う3つの身体には、各身体
（ポジション）からのバラの見え姿の違いよりも、各身体（ポジション）に共通する芳香こそが
クローズアップする。この共通経験が規範を生成させる。

ここで、「規範」という概念をきちんと定義しておこう。規範とは、妥当な行為群（あるいは、
妥当な認識群）を指定する操作のことである。妥当な行為とは、そのような行為が生じることが
想定できる行為のことである。--- 道徳的に正しい行為、欲している行為という意味ではない。た
とえば、授業中に私語をしている学生を、教師が大声で叱ったとしよう。この叱るという行為は、
直接叱られた学生はもとより、他の学生にとっても、また、当の教師自身にとっても不愉快な行
為である。しかし、いかに不愉快な行為ではあっても、学生も教師も過去に同じような行為を直
接間接に経験しており、授業中にそのような行為が発生することは想定可能である。したがって、
大声で叱るという行為は、妥当な行為ということになる。では、授業中に、突然、教師がカバン
の中からワインとチーズを取り出し、「ちょっと休憩」と、ワインを楽しみだしたらどうだろうか。
おそらく、学生たちは怒るも何も、それ以前に、「えっ、うっそー」と言葉を失うだろう。このよ
うな行為が想定外の行為、すなわち、非妥当な行為である。

規範には、大別して、「べし規範」と「である規範」の2種類がある³。これら2種類の規範は、
規範からの逸脱が発生した場合の対応によって区別できる。規範からの逸脱が生じた場合、逸脱
した人に規範に従うよう圧力がかかるのが「べし規範」、逸脱した人には圧力がかからず、規範の
方が、逸脱ケースをも許容・包含するまでに変化するのが「である規範」である。「べし規範」は
当為の認識を与え、「である規範」は事実の認識を与える。日常用語としての規範にも、規範が当
為の認識を与えることは含意されているが、事実認識もまた「である規範」という規範への随順
であることに注意されたい。

身体の溶け合いに話を戻そう。身体の溶け合いは共通経験をクローズアップし、この共通経験
から規範、すなわち、妥当な行為群が生成する。芳香を放つバラを囲んで互いに溶け合う3つ
の身体に対しても、規範、すなわち、妥当な行為群が生成する。その妥当な行為群には、「いい香り
だね」という発言、思わず鼻をバラに近づける仕草、等々が含まれる。

規範の生成と「意味」の生成はパラレルである。上のような妥当な行為群が生成されれば、目
の前のバラは、もう単なる「それ」ではない。それは、「いい香りを発するもの」としてのそれ
であり、「思わず鼻を近づけたくなるもの」としてのそれである。つまり、目の前のバラは、「いい
香りを発するもの」、「思わず鼻を近づけたくなるもの」という意味を獲得する。

大澤の規範理論の大きな特徴は、規範が帰属される身体、すなわち、「第三の身体」という概念
を軸に理論展開したところにある⁴。規範が、ある身体Xに帰属するとは、規範が、身体Xの「声」
として発せられるかのようになることである。バラをめぐる規範（妥当な行為群）も、何らかの
身体に帰属される。「いい香りだね」という発言は、いかに特定の身体の口から発せられようとも、
それは、身体Xの声を代弁しているだけなのだ。また、いかに特定個人が思わず鼻をバラに近づ
けようとも、それは、身体Xの声に操られているだけなのだ。

身体Xは、溶け合った3つの身体のいずれとも異なる、いわば4番目の身体であり、3つの身

³ べし規範、である規範は、それぞれ、大澤（1990）の価値的規範、認知的規範のことである。

⁴ 第三の身体は、大澤（1990）の第三者の審及のことである。

体のいずれにとっても、それは「他者」である。3つの身体（ポジション）からのバラの見え姿は、皆異なる。したがって、3つの身体の共通経験のみから生成した規範の声を発する身体は、3つの身体のいずれとも異なる、「第三」の身体でなければならない。第三の身体は、3つの身体の共通経験を代表しながらも、3つの身体のいずれとも異なる身体である。

以上をまとめると、複数の身体の溶け合いを通じて、それらの身体の共通経験がクローズアップされ、その共通経験によって規範（妥当な行為群）が生成される。しかも、それと同時に、規範の帰属先である第三の身体も生成される。これが、原初的な規範の形成プロセスである。

（2）規範の発達

自らの溶け合いによって規範と第三の身体を生成し、生成された第三の身体の声聞くようになった身体たちを、第三の身体的作用圏にあると言う。当初は、溶け合いによって第三の身体を生成した身体だけが作用圏に属している。しかし、作用圏のすぐ外部には、作用圏には属さない身体、つまり、作用圏内部の妥当な行為群が通用しない違和的な身体が存在する。

このような違和的身体との接触によって、規範は大きな岐路に立つ。一つの道は、違和的身体と作用圏内部の身体の間に溶け合いが生じ、違和的身体が作用圏の中に繰り込まれるという道である（こうして、繰り込んだ側の規範が発達する）。もう一つの道は、想定外の行為を平気でとる違和的身体を前に、作用圏自体が崩壊するという道である。規範は、違和的身体と遭遇するたびに、発達か崩壊かという岐路に立つことになる。

違和的身体との接触よりもドラスティックな事態は、異なる作用圏との接触によってもたらされる。この場合も、規範は発達か崩壊かという大きな岐路に立つことになる。崩壊ケースを先に言えば、接触した作用圏のいずれか、あるいは両方が崩壊する可能性もある。

しかし、ここに、「規範の伝達」が生じた場合には、大きな発達が可能になる。規範の伝達は、身体、事物、言語を媒介にして生じる。すなわち、規範の内実を色濃く担った身体、事物、言語が、ある作用圏から他の作用圏に伝達されるとき、規範が伝達される。

作用圏 A から作用圏 B へと規範が伝達されたとしよう。このとき、いかなる変化が生じるのか。まず、作用圏 A は、それまでの作用圏 B をも一部とするまでに拡大する。それに伴い、作用圏 A の規範は、作用圏 B の身体たちにも通用する程度にまで一般化する。それと同時に、作用圏 B は作用圏 A の下位システムとして、作用圏 A に繰り入れられる。かりに、作用圏 B の身体たちが、それまでと同じ行為をしていたとしても、その行為は、作用圏 A の規範によっても妥当とされるように、新しい意味を獲得する。

では、作用圏 A から作用圏 B へと伝達された規範が、さらに作用圏 C にも伝達されたらどうなるか。作用圏 C は、もはや作用圏 A の下位システムになった作用圏 B の、そのまた下位システムに繰り入れられる。ここに、さらに大きくなった作用圏 A の内部に作用圏 B があり、その作用圏 B の内部に作用圏 C があるという入れ子構造が形成される。

このような伝達の連鎖がさらに続けば、作用圏 A の規範は、より多くの身体たちを作用圏の内部に包含することになる。言うまでもなく、その規範は、多くの身体たちに通用する一般的な内容に改訂される。こうして、当初の小さな作用圏の内部でしか通用しなかった規範は、大きな作用圏をもち、一般性を有した規範へと発達していくのである。

また、このような規範の発達につれて、第三の身体は不可視の身体へと変じていく。前述のように、第三の身体は、溶け合う身体の内いずれとも異なる「第三」の身体であるがゆえに、そもそも具象的ではない。それは、基本的に、抽象的な身体である。しかし、原初的な規範の形成プロセスでは、第三の身体は、特定の身体とオーバーラップする ---- その意味で、具象的と言える。たとえば、先のバラの例で、溶け合う3つの身体のうち、A は母親、B と C は小さな子どもだっ

たでしょう。花に顔を近づけながら「いい香りだね」と言う母親に、バラなど初めて見たのに「イイカオリダネー」とオウム返しに答える子ども。そんな溶け合いから生まれる第三の身体は、多くの場合、母親の身体とオーバーラップする。これに限らず、母子の間では、さまざまな出来事をめぐって日常的に溶け合いが生じ、次から次に第三の身体（とそれに帰属される規範）が生成され、その多くが母親の身体にオーバーラップする……だからこそ、子どもにとって、母親の身体は格別な身体になる。

原初的には特定の身体とオーバーラップしていた第三の身体も、作用圏の拡大に伴い、次第にオーバーラップを減じ、不可視の身体になっていく。作用圏の拡大に伴い、第三の身体は、より一般的な規範の声を発する不可視の身体へと変態するのだ。

以上に述べた規範の発達をまとめておこう。規範は、作用圏の外部にある違和的身体を繰り返されることによって、また、その規範が別の作用圏に伝達されることによって、作用圏を拡大し、より一般的な内容の規範へと発達する。それと併行して、規範が帰属される第三の身体は不可視の身体へと変化していく。これが、規範の発達プロセスである。

（3）「肉体に内蔵された心」

ここまで論を進めると、「個人＝心を内蔵した肉体」という人間像がいかにして現前するようになったかを説明することができる。ただし、この人間像の説明は、発達初期のレベルと歴史的レベルに分けて行う必要がある。

まず、発達初期のレベルについて説明しよう。発達初期の幼児と親との濃密な溶け合いは、日々、次から次へと第三の身体を形成する。その多くは母親あるいは父親の身体とオーバーラップする。しかし、摂食、排泄、危険回避など、生存にとって必須の基本的所作については、その重要さのために格段に濃密な溶け合いが生じる。その結果として、基本的所作の規範を指定する第三の身体だけは突出的に発達する。すなわち、それらの第三の身体だけは、空間的、時間的な制約を受けることなく、基本的所作に関する規範を指定し、同時に、親の身体とのオーバーラップを減じ、不可視の身体へと近づいていく。

これは、子どもの身体から見れば、基本的所作に関しては、いつでも、どこでも規範の声が聞こえてくるという体制になる。どうだろうか。いつでも、どこでも規範の声（しかも、不可視の身体からの声）が聞こえてくるということは、あたかも自らの胸ポケットに声の源泉を入れて歩いているのと同じである。つまり、いつでも、どこでも規範の声が聞こえてくるという事態は、あたかも声の音源が胸ポケットにあるかのような現前（錯覚的現前）をもたらすのだ。その胸ポケットからほんの少し胸の内に入った場所、そこから聞こえてくるかのように現前する第三の身体の（規範の）声、それこそ心の声に他ならない。

歴史的レベルの説明に移ろう。発達初期のレベルの「肉体に内蔵された心」の観念は、おそらく、今と基本的に変わらない育児が開始された何万年前、あるいは何十萬年前以来のものであろう。それに対して、歴史的レベルのそれは、近代という歴史段階、すなわち、個人主義という個人の観念が確立した歴史段階に至って初めて登場した。その時代、政治、経済、教育、医療、宗教等々、重要な社会領域において、それまでの部族や小規模な地域社会を超えた国家規模の規範が形成された。言いかえると、いつでも、どこでも、そして、何についても規範の声を発してくる第三の身体の作用圏にいるという体制が成立したのだ（発達初期のレベルでは、何についてもではなく、基本的所作についてのみだった）。そうすると、「胸ポケットの第三の身体」効果は絶大なものとなる。自分の心（あるいは頭）で思考し、判断するという人間像、そして、そのような人間像が一つの「である規範」として機能する時代、すなわち、近代という時代が訪れたのである。

(4) 規範の発達の方

では、規範の発達はどこまでいくのか。規範の一般化、作用圏の拡大、第三の身体の不可視化はどこまで行くのか。

「いい湯加減の原理」というのがある。温度が30度の風呂はほとんど水風呂だ。夏ならともかく、冬場だと風邪をひくだけ。35度。まだまだぬるい。37、38度、ぬるめの湯が好きな人なら、いい湯加減である。40度、熱めの湯が好きな人には、いい湯加減である。では、50度では？これでは、火傷しそうで、入れたものではない。では、70度では？もうほとんど釜ゆである。30度から40度までは熱くなるほど心地よくなる。しかし、いい湯加減を超えると、心地よい風呂が、殺人の道具へと、性質を一変させてしまう。

ある閾値(いい湯加減)を超えると性質が一変するという原理は、規範の発達にも当てはまる。閾値を超えて一般化し、広大な作用圏に当てはまる規範、たとえば、「よく生きよ」という規範は、非常に一般的であり、広範な人々に当てはまる。では、だれかがナイフをあなたに向けたとき、「よく生きよ」という規範の声が聞こえたとして、あなたはもうどうしたらよいのか。逃げるべきか、立ち向かうべきか、あるいは、刺されるにまかせるべきか。「よく生きよ」という(過度に)一般化された規範は、確かに作用圏こそ広大かもしれないが、もはや、個別具体的な状況でとるべき行為を何も指示してくれない。つまり、閾値を超えて一般化した規範は、妥当な行為群を指定するという規範としての機能を失ってしまうのだ。

では、規範が閾値を超えて一般化し、その機能(妥当な行為群を指示するという機能)を失ってしまったら、どうなるのか。そこは、振り出しに戻るしかない。つまり、再び、身体との溶け合いを通じて原初的な規範を生成するフェーズに戻るしかない。こうして、話は、本節の冒頭へと回帰していく。

現在、交通・通信の発達によって、身体、事物、言語による規範の伝達は、ますます加速化されつつある。それは、さまざまな規範の作用圏が、他の作用圏を飲み込み、拡大していく過程でもある。また、社会の複雑化によって、今までは無縁に近かった規範同士(たとえば、経済をめぐる規範と宗教をめぐる規範)の間にも影響関係が生じ、そこでも規範の伝達が生じやすくなっている。そこには、規範の一般化、作用圏の拡大が閾値を超えて進行し、もはや規範が失効状態に入りつつあることを示す現象が多発している。

以上の大澤の身体論に基づき、集団主義、個人主義という概念を再定位するならば、個人主義は、社会的規模において第三の身体が(ほぼ)極限にまで強化された状態(肉体に内蔵された心が極限にまで重要視されるようになった状態)と言える。一方、集団主義は、第三の身体が、その作用圏を企業、コミュニティといった小規模な社会空間にとどめ、したがって、かなりの可視性(特定人物とのオーバーラップ)を残存させた状態、肉体に内蔵された心もマイルドにしか重要視されない状態と言える。

2. 現代日本社会の3つのトレンド

本節では、前節で紹介した大澤(1990)の理論枠組みに依拠しながら、現代日本社会の考察へと歩を進める。まず、日本人を集団主義によって特徴づけた過去の日本人論、とりわけ、その中でも最も卓抜した考察をなしている村上ら(1979)の「イエ社会」論を紹介する。次いで、1980年代以降、その集団主義の崩壊を示す社会現象が出現していることを述べ、集団主義の崩壊を1つのトレンドとして含む合計3つのトレンドについて、具体的な社会現象の例を交えて指摘する。

(1) 日本人の集団主義

1960年代から1970年代の高度経済成長期、および、その後1980年代末のバブル経済崩壊までの経済成長期には、日本人あるいは外国人（主として米国人）によって執筆された数多くの日本人論が登場した。その中で共通に強調されたのが、日本人の集団主義であった。

1960年代以来の日本人論としては、中根千枝(1967)「タテ社会の人間関係」、土居健郎(1971)「甘えの構造」などの先駆的論考に続いて、会田雄次(1970)「日本人の意識構造：風土・歴史・社会」、濱口恵俊(1977)「日本らしさの再発見」を始めとする日本人による日本人論が出版され、さらに、ヴォーゲル(Vogel, 1979)「ジャパン・アズ・ナンバーワン」、ライシャワー(Reischauer, 1979)「ザ・ジャパニーズ」といった親日家・ジャパノロジストによる日本人論も出版、翻訳された。これらの日本人論は、それぞれの論考で独自の側面に着目してはいるものの、大なり小なり、日本人を集団主義的、欧米人を個人主義的とする見方をとっている点では共通している（ただし、杉本&ロス・マオア(1982)「日本人は‘日本的’か」のように、そのような見方に異を唱える論考もあった）。

多くの日本人論の中でも、村上泰亮(政治学)、公文俊平(システム論)、佐藤誠三郎(歴史学)による共同研究「文明としてのイエ社会」(1979)は、日本型集団主義の歴史・社会的分析として興味深い仮説を提起している。その仮説は、現在の集団主義のルーツを、平安時代末期の関東平野に登場し、後に鎌倉幕府という連合体をつくった開発(かいほつ)領主の「イエ」にまでさかのぼる。開発領主のイエにおける組織編成原則は、①組織目標を組織の存続(系譜性)に置くこと、②組織の存立根拠を超血縁性に置くこと、③組織の構造として機能的な階層構造をとること、④組織の自立性を重んじることの4つであった。ここに、超血縁性とは、養子の慣行が示すように、組織メンバーとなる条件として、もはや現実あるいは共同幻想上の血縁を条件とはしないが、一旦組織メンバーになった際にはあたかも血縁関係にあるかのような濃密なメンバー間関係を要請するという原則である。血縁を条件としない点で、歴史上、イエ型の組織編成原則に先立って登場したウジ型の組織編成原則と大きく異なっている。

村上ら(1979)によれば、イエ型組織編成原則は、開発領主の連合体である鎌倉幕府の組織編成原則としても採用され、その後、質的な変容を遂げながらも基本は維持しつつ、室町時代以降の守護大名、戦国大名、さらには江戸時代の大名家の組織編成原則として継承された。とりわけ、江戸時代には、大名家のイエ型組織編成原則は、「倣い縮小」する形で豪農・豪商の組織編成原則として採用され、これが明治期以降、企業や官庁に継承された。さらに、昭和期に入り、イエ型組織編成原則の特長を生かしつつ戦時体制を強化する過程で、現在の日本企業に見られる終身雇用、年功序列賃金、企業内組合という制度が確立された。一方、家庭に目を転ずれば、江戸期に大名家のイエ型編成原則を極限まで倣い縮小する形で形成された武士家族の小イエが、現在の家族のルーツになった。

ここで、1960年代から1980年代前半にかけて出版された多くの日本人論に立ち戻ろう。その時期、なぜ日本人論が隆盛を呈したのだろうか。その理由は、東洋の奇跡として世界中が驚異の目で見つめた高度経済成長にある。1960年代、日本は戦後の復興というレベルを超えて急速な経済成長を続け、1970年代半ば頃までにはガルブレイス(Galbraith, 1958)の言う「豊かな社会」、すなわち、社会のほとんどの人にとって、明日のパンと明日の寒さにおびえる必要のない社会に突入した。明治期以来、ひたすら欧米へのキャッチアップをめざしてきた日本にとって、少なくとも物質的豊かさにおいては、欧米と比べてもそれほど遜色のないレベルに到達した。しかも、まわりのアジア諸国を見渡しても、ただ日本だけ、他に追随しそうな国はまったく見当たらなかった。

日本の高度成長を可能にした国際的・国内的理由はいくつかあるが、日本人の勤勉さ、高い

勤労意欲が重要な理由として考えられた。実際、世論調査の国際比較でも、日本人は際だって高い勤労意欲を示していた（Meaning of Working International Research Team, 1986; 三隅, 1987）。「なぜ日本人はよく働くのか」、「なぜ日本人は一致団結して会社のために働くのか」……これは外国人にとってよりも、まず日本人自身にとって不可解な「事実」であった。「ここまで勤勉で、会社に尽くすわれわれ」は、一体、いかなる存在なのか？自分たちはどういう人間なのか？この自問自答が日本人論の隆盛につながった。

この疑問に答えるべく脚光を浴びたのが、わが国、少なくともわが国の企業組織における集団主義的体質であった。日本企業の集団主義的体質を反映する制度として、終身雇用、年功序列賃金、企業内組合に注目が集まった。これらの制度は、日本的経営の三種の神器とも呼ばれた。さらには、QC（Quality Control：品質管理）サークル活動、ZD（Zero-Defect：無欠陥）活動、自主管理活動等の名称で普及した日本型の職場内小集団活動（トップダウンではなく、一般従業員が職場集団ごとに業務の改善に取り組む運動）は、4番目の神器とまで評価された。これら都合4種の神器に共通するのは、集団主義的体質である。定年までの長期間、同じ企業で働くことが保証されていればこそ愛社精神も生まれる（終身雇用）、だれでも平等に歳を重ねる以上、年齢をベースとした賃金体系は従業員の平等意識を育む（年功序列賃金）、職能別全国横断の労働組合ではなく、経営者と労働組合が同じ会社の釜の飯を食う関係だからこそ、建設的な労使関係が保証される（企業内組合）と考えられた。4番目の神器（職場内小集団活動）が集団主義に支えられている（と考えられた）ことに説明は要しないだろう。

このような日本企業の長所として集団主義が脚光を浴びたことの裏返しとして、ともすれば日本からの輸出攻勢に汲々とする欧米（特に米国）企業の短所として個人主義があげられた。つまり、当時の日本人にとって、集団主義—個人主義という概念は、自らの奇跡的経済発展を理解するためのツールとしての役割を果たしたのである。したがって、このような理解は、高度成長期以前（正確には、高度成長は始まっていたが、その成果がまだ十分実感されていなかった1960年代、および、それ以前）には存在しなかったばかりか、上記の三種の神器に至っては極めて否定的に捉えられていた……働かなくても首を切られない会社、歳さえ食べれば給料が上がる会社、経営者と組合が馴れ合いでやっている緊張感もない会社、そんな会社に欧米のようないい製品など作れるはずがない、と。その否定的評価は、1980年代末のバブル経済の崩壊に始まる経済停滞期に再来した。集団主義は時代遅れなものとして、個人主義的な能力主義、成果主義がもてはやされた……出る杭が打たれるような会社、社会では、新しい技術やビジネスモデルの発見などありえない、と。

（2）3つのトレンド

かつての日本人論ブームで論じられた日本人の集団主義は、現在明らかに崩壊しつつある。家族の中では、親は子を虐待し、子は親を殺害する。コミュニティでは、都会、農村の別なく、予期せぬ誘拐、殺害が頻発し、子どもが自由に外で遊ぶこともできなくなった。そんな事件が、毎日のようにマスコミで報道される。一方、企業では、集団主義的な「日本的経営」だけではグローバルな競争に勝ち抜くことはできなくなった。能力ある人材を年俸制で獲得しなければならない。一方、若年層を中心に、職場第一の人生は拒否される。さらに、職場不適應による長期休暇者は、どこの職場にもいる。

この世の現象が万事、良き面と悪しき面の両方をもつならば、このような集団主義の崩壊には良き面もあるはずである。では、集団主義は、現在、どのような道を進もうとしているのか。第1節で紹介した大澤（1990）の理論は、そのような考察の枠組みを与えてくれる。

a. 「集団主義＝マイルドな個人主義」の崩壊

わが国の集団主義の崩壊は、第1節末尾に述べたような第三の身体の過度の発達（過度の個人主義化）の帰結として生じる、原初的な規範形成フェーズへの回帰とは思われない。なぜならば、わが国における第三の身体は、抽象化・不可視化の程度において欧米の水準にはおよそ達していない。それは、わが国が、個人主義の程度においておよそ欧米の水準に達していないことに反映されている。

しかし、ここで考えておくべきは、欧米における個の確立（内界の心の重要視）は、外界のコントロール（外部環境のコントロール）の必要性に促されつつ進行したという点であろう。その点において、日本における個人主義化も例外ではない。しかし、明治以来、欧米の近代化の成果を受容することからスタートした（スタートできた）わが国は、欧米よりも短期間で物質的豊かさを実現し、それとともに外界コントロールの必要性からもフリーになりつつある。ここに、まだ理論的には個人主義化が進行する余地を残しながらも、第三の身体の崩壊フェーズに入りつつある理由がある。

欧米に比べればマイルドな水準にしかない日本の個人主義、それは、欧米と比較すれば集団主義に映る。上に述べた集団主義の崩壊は、マイルドな個人主義の基盤である（マイルドにしか一般化・抽象化していない）第三の身体の崩壊なのである。しばしば、「最近の日本人は個人主義的になった」といった言説が聞かれるが、それは誤りである。そのような言説は、「集団主義か個人主義か」という2項図式に呪縛されており、「集団主義でなければ個人主義」という思いこみにとらわれている。集団主義の崩壊を表現するには、個人主義化（あるいは、個人化）ではなく、「個別化」という用語を用いるべきだろう。

大澤（1996）は、1995年、東京の地下鉄でサリンガスによる無差別殺人に及んだカルト集団「オウム真理教」について、マイルドな個人主義の崩壊、原初規範の形成フェーズへの回帰という観点から興味深い考察を行っている。第1節で述べたとおり、原初規範は、身体の「溶け合い」から形成される。したがって、原初規範の形成フェーズへの回帰とは、まづもって、溶け合う身体への回帰である。

個人主義に言う個人の身体は「個体」に、溶け合う身体は「気体」になぞらえることができる。個人主義に言う個人の身体は、皮膚で画された肉体の中に、判断の座である中核部分を内蔵している。それは、内部に中核部分を有する固体に似ている。一方、他の身体と溶け合う身体は、気体に似ている。――最初は分離している複数の気体は、容易に混ざり合い、最初の区別はなくなってしまう。

オウム真理教は、最初から凶悪な殺戮集団であったわけではない。教団結成の初期においては、むしろ牧歌的な瞑想愛好者の集団であった。では、信者たちは何を求めて教祖（麻原彰晃）のもとに集まったのだろうか。その信者が求めたものこそ、気体化した身体の状態だったのだ。麻原を一躍有名にした写真が、空中浮揚の写真だったこと（気体のように浮揚）、体外離脱への憧れ（気体のように可動性をもつ身体）、シャクティパットと呼ばれる儀式（麻原が信者の眉間に長時間親指を強く当てる儀式；あたかも二人の身体が気体であるかのように溶け合う）、信者が頭にヘッドギアをつけていたこと（麻原からの電磁波を受信する装置；信者の増加に伴い困難になったシャクティパットの代わり；気体と電磁波の親近性）は、信者の修行の目的が、自らの身体の気体化であったことを示唆している。

オウム真理教は、新々宗教に分類されている。新宗教とは、仏教、キリスト教のような伝統的宗教に対する新しい宗教として、戦前から戦後まもなくまでに成立した宗教であり、創価学会、立正佼成会などはその例である。新宗教においては、入信の理由が比較的明快であった。―― 貧困、病苦、不和からの救済が、入信の主たる理由・動機であった。それに対して、オウム真理教、真

如苑などに代表される新々宗教の信者は、貧困、病苦、不和からの救済を求めて集まるのではない。実際、オウム真理教の信者は、中流家庭の人が多く、別段、病気や家庭の不和に苦しんでいたわけではなかった。信者には、大学生をはじめ高学歴の若者が多かった。

オウム真理教の信者は、欧米の域には達していない個人主義であっても、それに息苦しさ、生きにくさを覚え、そこからの脱出路として気体化した身体に憧れたのだ。そこには、新しい時代を先取りする若い人々に共通するトレンドが反映されている。

溶け合う身体への回帰は、オウム真理教事件のようなネガティブな現象のみを惹起したのではない。次に、ポジティブな現象の一例として、日本社会におけるボランティア（活動）に注目してみよう。オウム真理教による地下鉄サリン事件の2ヶ月前、大地震が阪神地区を襲った。死者は6,000人を超えた。この未曾有の大災害にあって、一つだけ未来への光明がさしたとすれば、それは、延べ百万人とも言われる救援ボランティアの登場だっただろう。マスコミには「ボランティア元年」という言葉が踊った。

1980年代から日本社会にも徐々にボランティア活動は広まりつつあった。しかし、まだまだ先駆者の時代、つまり、一部の人間が行う特殊な活動だった。それが、阪神大震災で一気到大衆化したのだ。その意味で、1995年は「ボランティア大衆化元年」だった（Yatsuzuka, 1999）。

筆者は、阪神大震災の3日後から被災地に入り、その後長期にわたって多くのボランティアとともに救援活動に携わりながら、現地の推移を観察した（城・杉万・渥美・小花和, 1996）。ボランティアには多種多様な人々が含まれていたが、最も多かったのは大学生だった。彼らと活動をとる中で、目の前のボランティアたちと、筆者が学生だったころ（1970年ごろ）の政治運動、社会運動との大きな違いに気がついた。

かつての政治運動や社会運動の原動力は、理想や思想（イデオロギー）であった。それに対して、被災地で見たボランティア活動は思想的に無臭であった。被災地で活動した多くの団体の中には、筆者と同じ世代がリーダーシップをとり、明確な思想性を打ち出していた団体もあった。しかし、そのようなリーダーは、いつしか大多数のボランティアから孤立していった。

では、ボランティアを救援活動へと突き動かすものは何なのか。彼らの原動力は、身体の溶け合いではないのだろうか。被災者のために炊き出しをする、大量の被災者が身を寄せる避難所で労働をする、高齢者や障害者など災害弱者と呼ばれる人たちを励まし援助する、そのような救援活動を通じて、被災者と至近距離で触れ合う。その至近距離での触れ合いは、救援する者と救援される者の垣根をなくし、双方が溶け合う状態をもたらす。被災者の話に涙を流すボランティア、ボランティアの手を取って感謝する被災者、その双方はまさに溶け合いの状態にある。それは、双方の身体が気体化し、溶け合う状態である。

理想や思想は、高度に抽象化した規範である。したがって、理想や思想に駆動される身体は、高度に抽象化した規範の作用圏に身を置いている。それが、かつての政治運動、社会運動だった。それとは対照的に、被災地で活動するボランティアたちは、思想的無臭性を特徴とし、溶け合う身体を希求しつつ活動する。その点は、阪神大震災以降、ボランティア活動の一領域をなすにいたった災害NPO（災害救援・防災活動に特化した非営利組織）に限らず、福祉、地域づくり、海外協力など、他の領域で活動するボランティアたちにも共通している。

b. 「個人主義以前の集団主義」から「マイルドな個人主義」へと向かうトレンド

もし、欧米のように、個人主義が文字どおりに徹底化された結果として、身体の溶け合いに回帰するならば、それはポストモダン（ポスト近代）のトレンドと呼んでもよいだろう。欧米では、「前近代（集団主義）→近代（個人主義；そのピークが19世紀末）→ポスト近代（溶け合いへの回帰）」というように、3つのフェーズが順を追って登場した。しかし、このような経路をた

どったのは、あくまでも欧米が先頭集団であったがためであり、欧米の強い影響を受けて近代化を開始した後発国では、そのような単線的な経路は必ずしも当てはまらない。日本社会も、その点を踏まえて考察されねばならない。

すでに述べたように、日本社会では、欧米の水準にはおよそ達していない個人主義（マイルドな個人主義）から、すでにして溶け合う身体への回帰が始まっている。このトレンドは、図1の③によって示されている。しかし、同時に、日本社会には、あと2つのトレンドも存在している。あと2つのトレンドのうち一つは、（個人主義以前の）集団主義からマイルドな個人主義へと向かうトレンド（図1の①）であり、もう一つは、マイルドな個人主義から本格的な個人主義へと向かうトレンド（図1の②）である。

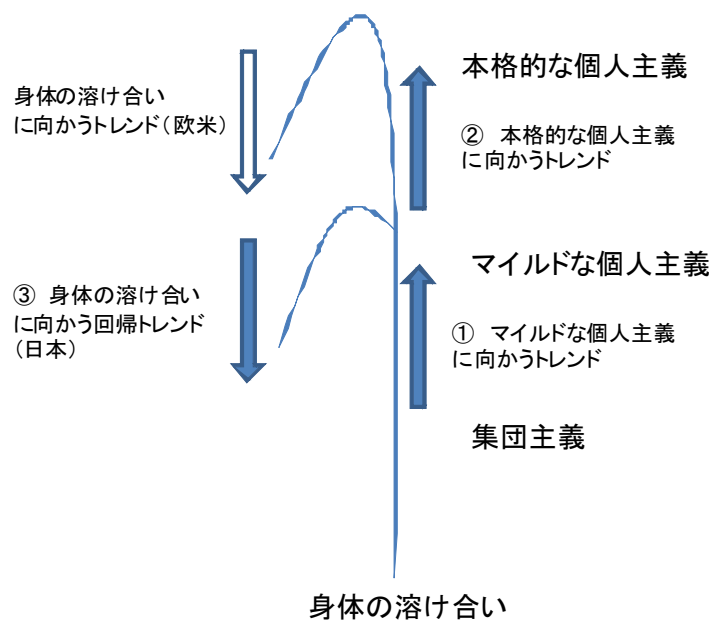


図1. 現代日本社会における3つのトレンド

本項では、集団主義からマイルドな個人主義へと向かうトレンドについて、過疎地域の活性化運動を例に述べてみよう。筆者は、過疎地域と呼ばれる農山村の地域活性化運動に関与してきた。そもそも、過疎問題は、1960年代の高度経済成長の時代に、農山村から大量の若い人々が都市部へと流出したことによって発生した。人口が流出する田舎では、地域を支えてくれる若者を失い、地域の生活基盤を維持するのさえ困難になった。それが、高度成長期における過疎問題であった。一方、大量の人々が流入してくる都市部では、生活基盤の整備が追いつかず、過密問題を抱えることになった。

しかし、1960-70年代の高度経済成長の果実は、当初は都市部に、次いで田舎にも及んでいった。その物質的豊かさによって、生活基盤の崩壊という過疎問題は解決していった。しかし、田舎から都市への人口流出は止まったのかというと、そうではない。確かに、高度成長期のような急激な人口流出は緩和したもの、依然、人口流出は続いている。都市ほどの利便性はないに

ても、田舎には豊かな自然、新鮮な野菜、広い住宅がある。また、田舎といえども、車を1時間ほど飛ばせば、中規模の地方都市があり、レジャーもショッピングも楽しめる。それでも若者はふるさとを捨てる。

では、なぜ若者はふるさとを捨て続けるのか。その主たる原因は、過疎地域がもつ旧態依然の地域体質にある。具体的には、①新しい試みに耳を閉ざす保守性、②地域の外に目を向けようとしない閉鎖性、③一握りの有力者による地域支配、これらに代表される地域体質を嫌って、若者はふるさとを捨てる。したがって、1980年代以降の過疎問題は、1960-70年代のそれとは性質を異にする。1960-70年代の過疎問題は、いかにして生活基盤の崩壊を食い止めるかという経済問題だった。それに対して、現在の過疎問題は、地域体質に起因する社会心理の問題なのだ。

保守性、閉鎖性、有力者支配は、まさに地域の集団主義の現れである。そうだとすれば、集団主義を個人主義の方向に変革すること、よい正確には、集団主義をマイルドな個人主義の水準に変革することは、上記の地域体質を変革することにつながる。

本稿では、そのような地域体質の改変を極めてラディカルに、かつ20数年にわたって展開してきた過疎地域、鳥取県智頭町の例を紹介しよう。智頭町は、筆者が10数年にわたって、現地の改革運動に携わりつつ、現場研究の対象としてきた地域でもある。その20数年の運動は、リーダーとなる2人の人物の出会いに始まり、苛烈とも言える2人を中心とする挑戦は、研究者とも連携しつつ、町行政を突き動かすに至る(杉万, 2000, 2006第2章; Sugiman, 2006)。

智頭町は山間の地、まわり一面を杉の山に囲まれている。2人は、杉の付加価値化をねらったプロジェクトからスタートした。杉の山林の多くは一握りの資産家の所有である。しかし、従来、その杉が積極的な付加価値化の対象とされることはなかった。2人は、枝打ちで落とした枝や、間伐材など、それまで捨てられていた端材(はざい)に目をつけ、ウッドクラフトを開発した。次は、杉を使った住宅の設計コンテストを開催、「智頭杉」というブランドを確立した。さらに、智頭町の中でも最も山奥にある集落に、杉を使ったログハウス群を建築し、「杉の木村」というレクリエーションエリアを建設した。

以上のプロジェクトは、単なる杉の付加価値化という以上の意味をもっている。それらは、旧態依然たる地域体質(保守性、閉鎖性、有力者支配)に対する過激な挑戦だった。ある者は冷ややかな眼差しを向けることによって、ある者は無視することによって、ある者は露骨に圧力をかけることによって、2人の行動を「一時の間違い」にしようとした。

2人が立ち上がって10年。2人を中心とする活動は、行政(役場)を突き動かし、画期的な施策を実現していった。その中でも、最も特筆すべき施策は、集落単位の活性化運動だった。智頭町には、20-40世帯からなる集落が89ある。それらの集落単位で、住民自らが10年後の集落ビジョンを描き、それを住民自らが中心になって実現するという運動である。役場は、運動を行う集落住民の組織を認知し、支援をするが、あくまで脇役である。

この運動には、地域経営、交流、住民自治という3つの柱が定められた。すなわち、自らの集落を経営の視点で見直し、集落の宝を発掘する;国内国外を含めて集落外と積極的に交流する;従来の世帯主しか参加できない会合ではなく、老若男女だれでも全員が参加して意志決定を行う。これを従来の地域体質との関連で言い直せば、地域経営によって保守性を打破、交流によって閉鎖性を打破、住民自治によって有力者支配を打破していこうというわけだ。

集落活性化運動は、同運動に参加した集落の体質を大きく変化させた。それまでは集落の会合に出席できるのは世帯主だけだったが、老若男女だれでも個人の資格で活動に参加できるようになった。そのような人々の中から、同運動がなかったら生まれなかったであろう新しいリーダーが誕生した。筆者が行ったアンケート調査で、「同運動で自分を生かせる場ができた」と答えた人も少なくなかった。

以上のように、集落活性化運動によって、長らく続いてきた地域の集団主義的体質が打破され、個人主義への歩みが始まった。しかし、その目指すところは、必ずしも欧米並みの本格的な個人主義とはいえない。むしろ、従来の集団主義の弊害を除去した上で集団主義を残存させ、それに加えて個人主義の要素も取り入れようというマイルドな個人主義が目指されている。この点は、智頭町に限らず、全国の村おこし、町おこしの多くにも共通している。

c. 共存輻輳する3つのトレンド

以上、阪神大震災以降のボランティア活動と、鳥取県智頭町の地域活性化運動を事例に挙げながら、現代の日本社会には、マイルドな個人主義から身体の溶け合いに回帰するトレンドと、集団主義からマイルドな個人主義に移行するトレンドがあることを論じた。ただ、現代日本社会には、この2つのトレンドに加えて、マイルドな個人主義から欧米並みの本格的個人主義へと移行するトレンドも見えて取ることができる。

本格的個人主義に向かうトレンドを促進するのは、何といても経済のグローバル化である。1980年代以降、日本企業は、それまでの国内生産・対外輸出オンリーの体制から海外生産を重視する体制に変更した。また、日本国内に進出する外国企業も激増した。また、経済以外の分野でも、海外との交流は飛躍的に増大した。こうして、好むと好まざるとにかかわらず、日本人は、本格的な個人主義を自明とする欧米人と至近距離の関係をもつようになった。そのような欧米人との接触が、多数とは言えないまでも、日本人の中に本格的個人主義へのトレンドをもたらすのは当然であろう。

マイルドな個人主義から本格的個人主義に向かうトレンドは、マイルドな個人主義に残存していた集団主義的要素を払拭していくトレンドでもある。しかし、前述したとおり、同じく集団主義的要素が消滅するからといって、本格的個人主義へと向かうトレンドと、身体の溶け合いに回帰するトレンドを混同してはいけない。前者は、個人主義を徹底化する方向にあるのに対して、後者は、個人主義とは対極的な原初的規範の生成フェーズに向かうトレンドだからだ。筆者の主観的判断に過ぎないが、前者の本格的個人主義に向かうトレンドは、ごく一部の人に限定されているのに対して、身体の溶け合いに向かうトレンドは、若年層を中心にかなり広範に浸透しつつあるように思われる。

本稿を閉じるに当たって、主観的に過ぎるのは承知の上で、上記3つのトレンドを頭に置き、今から20年程度の近未来の日本社会像を占ってみたい。20年という時間は、かりに、15-35歳（若年・壮年期）、35-55歳（中年期）、55-70歳（高年期）、70歳以上（高齢期）といった年齢区分を設けたときに、現在よりももう一つ上の区分に移行するまでの時間である。

おそらく、その程度の近未来においては、マイルドな個人主義を中心としながらも、それを、身体の溶け合いへと向かうトレンドが急速に浸食していくだろう。すでに身体の溶け合いへと向かうトレンドを色濃く担っている若年層（15-35歳）が、社会の中心的立場を担うようになるにつれて、身体の溶け合いへと向かうトレンドは、急速に支配的になるはずだ。

本格的な個人主義へと向かうトレンドは、全体から見れば、少数にとどまるだろうが、マイルドな個人主義の衰退を加速するだろう。繰り返し述べたように、本格的な個人主義へと向かうトレンドは、身体の溶け合いに向かうトレンドとは性質を異にする。しかし、両者は、マイルドな個人主義に残存する集団主義的要素を否定する面では共通している。そこには、両者が、性質は異にしつつも、マイルドな個人主義に残存する集団主義的要素の排除に向けて「共同」する可能性がある。

本格的な個人主義へと向かうトレンドは、「わが道を行く」信念と行動力を特徴とする。それに対して、身体の溶け合いに向かうトレンドは、若年層、そして壮年層に広く浸透するものの、理

念やイデオロギーを否定する方向にある。したがって、そのトレンドの主張を明確に言語化することは困難であり、また、それゆえに、大量の人々を組織化していく力にも欠けている。ここに、本格的な個人主義へと向かう言説が、あたかも身体の溶け合いへと向かうトレンドを正当化するかのような「共闘関係」が、両者の間に成立する可能性がある。

以上をまとめると、わが国の近未来は、マイルドな個人主義（残存する集団主義）の崩壊と、身体の溶け合いへの回帰を軸に進行すると予想される。本格的な個人主義も増えるだろうが、それが大勢を占めるとは思われない。また、少数の本格的個人主義の人たちが社会に影響を与えるとしても、それは、身体の溶け合いを求める多数派に融合・融和することが必須条件となるだろう。

では、そのような近未来を見据えたとき、いかなる能動的試みが必要になるだろうか。そこで押さえておくべきは、身体の溶け合いは決してそこで止まらず、原初的な規範、原初的な第三の身体の形成に向かうという点である。つまり、身体の溶け合いを通じて向かうところは集団主義なのである。それは、一見、マイルドな個人主義が中心となる以前の日本に存在した集団主義と類似したものとなるだろう。

その意味で、これからの進路は、一見、「昔がえり」の色彩をもつことになる。しかし、決して時計は逆向きには進まない。マイルドな個人主義を経験した社会が向かおうとする「昔」は、過去の昔ではありえない。そこには、マイルドな個人主義の社会で経験したことが自ずと反映されざるをえない。

より能動的な試みとしては、マイルドな個人主義の社会で手に入れた知識や技術を用い、創造的に「昔がえり」することが求められる。これからの進路は、「創造的昔がえり」と呼ぶべきものになるだろう。以前の家族やコミュニティのように、血縁、地縁といった「自然の場」にだけ頼っている、身体の溶け合いを通じた集団主義を実現できる見込みはない。自然の場は、すでに弱体化している。コミュニティの絆は失われ、企業の求心力も昔の面影はない。核家族まで収縮した家族すら、離婚の増大によって不安定化している。軒を並べて生活しているから、同じ会社で働いているから、血のつながりがあるから、といった自然の根拠に基づく（自然の）場は、もはや、身体の溶け合いの場を提供するに十分ではない。

そうであれば、自然の場に代わる新しい場を創造する以外に道はない。その新しい場は、創造の産物であるがゆえに、人為的な場だ。その場に集まる人々が身体の溶け合いを経験でき、そこから原初的であっても自らに方向性を与えてくれる実質的な規範を形成できる ---- そのような場を創造することが求められよう。

身体の溶け合いを経験できる場であるためには、いくつかの必要条件がある。まず、階層構造はなるべくフラットで、分業構造も柔軟である必要がある。階層の隔たりや固定した分業は、他の身体になるのを妨げる（身体の溶け合いを妨げる）。また、一方向的ではなく、双方向的な影響関係を促進する工夫も必要だろう。指示すると同時に指示される、教えると同時に教えられるという関係は、まさに互いの身体になる経験を促進する。

われわれの周りには、すでに、そのような新しい場の萌芽を見ることができる。たとえば、1995年の阪神大震災以降、急速に大衆化したボランティア活動の場は、上記の必要条件をかなりの程度満たしている。また、コミュニティの時代といわれるように、近年、自らが住むコミュニティの改善に取り組む活動が増加している。企業組織に比べれば、コミュニティという場は、上記の必要条件をより満たしている。

企業組織の場にも、上記のような必要条件を満たす方向での工夫を取り入れる余地はある。昨今流行しているコーチングというリーダーシップ・スタイルは、あたかもマラソン選手に伴走するコーチのようなリーダーシップを意味している。そこには、お互いの息づかいを感じ合える溶

け合いの関係が目指されている。また、情報技術の進歩は、従来、遠方からしかまみえる機会のなかったトップと一般メンバーの関係を、直接的関係に近づけることを可能にする。かりにオンライン上のメッセージや音声であっても、それを発し、それを受け取る身体同志には、今まではありえなかった溶け合いへの契機が生まれる可能性がある。

引用文献

- 会田雄次 (1970). 日本人の意識構造：風土・歴史・社会, 講談社.
- 土居健郎 (1971). 「甘え」の構造, 弘文堂.
- Galbraith, J. K. (1958). *The affluent society*. Boston: Houghton Mifflin. 鈴木哲太郎訳 (1985) ゆたかな社会, 岩波書店.
- 濱口恵俊 (1977). 「日本らしさ」の再発見, 日本経済新聞社.
- 廣松 渉 (1982). 「存在と意味 (第一巻)」, 岩波書店.
- 城 仁士・杉万俊夫・渥美公秀・小花和尚子 (1996). 心理学者がみた阪神大震災：心のケアとボランティア, ナカニシヤ出版.
- Meaning of Working International Research Team (1986). *The meaning of working*, Academic Press.
- 三隅二不二 (1987). 働くことの意味：Meaning of Working Life (MOW) の国際比較研究, 有斐閣.
- 村上泰亮・公文俊平・佐藤誠三郎 (1979). 文明としてのイエ社会, 中央公論新社.
- 中根千枝 (1967). タテ社会の人間関係, 講談社.
- 大澤真幸 (1990). 身体の比較社会学 I, 勁草書房.
- 大澤真幸 (1996). 虚構の時代の果て：オウムと世界最終戦争, 筑摩書房.
- Reischauer, E.O. (1977). *The Japanese*. Harvard University Press. 國弘正雄訳 (1979) ザ・ジャパニーズ, 文藝春秋.
- 杉万俊夫 (2000). 住民自治の社会システムをめざして. 杉万俊夫 (編) よみがえるコミュニティ, ミネルヴァ書房.
- 杉万俊夫 (2006). コミュニティのグループ・ダイナミックス. 京都大学学術出版会.
- Sugiman, T. (2006). Theory in the context of collaborative inquiry. *Theory & Psychology*, **16**(3), 311-325.
- Sugiman, T. (2008). A theory of construction of norm and meaning: Osawa's theory of body. In T. Sugiman, K. Gergen, W. Wagner, & Y. Yamada (Eds.) *Meaning in Action: Constructions, Narratives and Representations*. Springer.
- 杉本良夫&ロス・マオア (1982). 日本人は「日本的」か, 東洋経済新報社.
- Vogel, E.F. (1979). *Japan as number one: Lessons for America*. Harvard University Press. 広中和歌子・木本彰子訳 (1979) ジャパン・アズ・ナンバーワン, TBSブリタニカ.
- Yatsuzuka, I. (1999). The activity of disaster relief volunteers from the viewpoint of social representations: Social construction of Borantia (volunteer) as a new social reality after the 1995 Great Hanshin Earthquake in Japan. In T. Sugiman, M. Karasawa, J. Liu, & C. Ward (Eds.), *Progress in Asian Social Psychology (Volume 2)*. Korea: Kyoyook-kwahak-sa.

— 2009. 11. 15 受稿, 2010. 1. 31 受理 —

Three trends in contemporary Japanese society:
From the viewpoint of collectivism-individualism

Toshio Sugiman (Kyoto University)

We discussed the major characteristics of contemporary Japanese society from the viewpoint of collectivism and individualism. The concepts of collectivism and individualism in this paper are quite different from the ones that have been used so far in social psychology, especially cross-cultural psychology where the focus is in comparison between the West and the East. When informed by the mind-in-a-body paradigm, both traditional social psychology and cross-cultural psychology define collectivism as the psychological tendency to emphasize relationships with other people in one's mind, and individualism as the psychological tendency to emphasize one's own thoughts and emotions in one's mind.

In this paper, the two concepts are redefined from the social constructionist perspective, specifically based on a sociological body theory of norm proposed by the Japanese sociologist, Masachi Osawa (Sugiman, 2008). The theory argues that norm, defined as an operation to indicate a set of valid (or assumable) actions, is the voice of a third body, something like a god, that is born from a situation named an inter-bodily chain in which one becomes others. An inter-bodily chain develops when two or more specific bodies interchange intensely and frequently. The third body is different from each specific body in the chain but represents all of those bodies. When the third body is born, it is visible in the sense that it overlaps with a specific body, but it can reduce the overlap and thus become more invisible while making its voice (i.e., the content of norm) more general and increasing the number of bodies that are in the sphere of its influence.

In this paper, we point out that collectivism corresponds to a situation in which a visible third body is prevalent while individualism corresponds to a situation in which an invisible third body is prevalent. This paper proposes, with some real examples, that three trends are proceeding in contemporary Japanese society, i.e., (1) a trend shifting from collectivism to mild individualism, (2) a trend shifting from mild individualism to genuine individualism, and (3) a return from mild individualism to a situation in which an inter-bodily chain is prevalent. We emphasize that the third trend should not be mistaken for the second, because losing collectivism that remains in mild individualism is not the same as becoming more individualistic. It reflects a mainstream trend toward the development of new interchanging bodies.

Key words: contemporary Japanese society, sociological body theory of norm, collectivism, individualism, dissociation

Author:

Sugiman, T.

Graduate School of Human and Environmental Studies, Kyoto University, Kyoto,
Japan. Mail: sugiman@toshio.mbox.media.kyoto-u.ac.jp